

高等学校における 「主体的・対話的で深い学び」 の実現に向けて

【外国語科（英語）編】

平成30年度 高等学校における教科指導充実に関する調査研究

栃木県総合教育センター 平成31年3月

今の生徒たちが社会で活躍する時代 …… 2030年を見据えて

今の高校生たちが社会で活躍する2030年頃には、日本は「厳しい挑戦の時代」を迎えていると予想されています。少子高齢化に伴う生産年齢人口の急激な減少やグローバル化の進展、技術革新や人工知能(AI)の進化等により、社会の構造や雇用環境が大きく変化し、その変化が加速度的に進むものと考えられているからです。そのような社会においても、人間が人間らしい感性を豊かに働かせながら、未来を創造し、社会や人生をよりよいものにしていくためには、どのような資質・能力を身に付ける必要があるのかということ踏まえて、新しい学習指導要領がつけられました。

新しい学習指導要領の方向性と「主体的・対話的で深い学び」

平成28年12月に中央教育審議会が出した答申を踏まえて、高等学校の新しい学習指導要領が平成30年3月に公示されました。今回の学習指導要領改訂では、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、「新しい時代に必要となる資質・能力」を三つの柱に整理した上で、「何を学ぶか」という学習の目標や内容の見直しとともに、「どのように学ぶか」という学びの過程についても見直すよう求めています。

これまで、学習指導要領では「生きる力」の育成を基本理念として、各教科・科目で学習する内容について定めてきました。今回の改訂では、「生きる力」を捉え直して育成すべき資質・能力として整理した上で、知識・技能の習得だけでなく、それらを活用することで課題の解決に向かったり、よりよい社会の形成に役立てたりすることを目指しています。

そのために必要となるのが、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善です。これは、授業に活動(アクティビティ)を取り入れた「アクティブ・ラーニング」の実施を意味するものではありません。「主体的な学び」の実現、「対話的な学び」の実現、「深い学び」の実現という視点で、これまでの授業を見直し、「教師が教える授業」から「生徒が学ぶ授業」への質的転換を図るという意識が重要です。

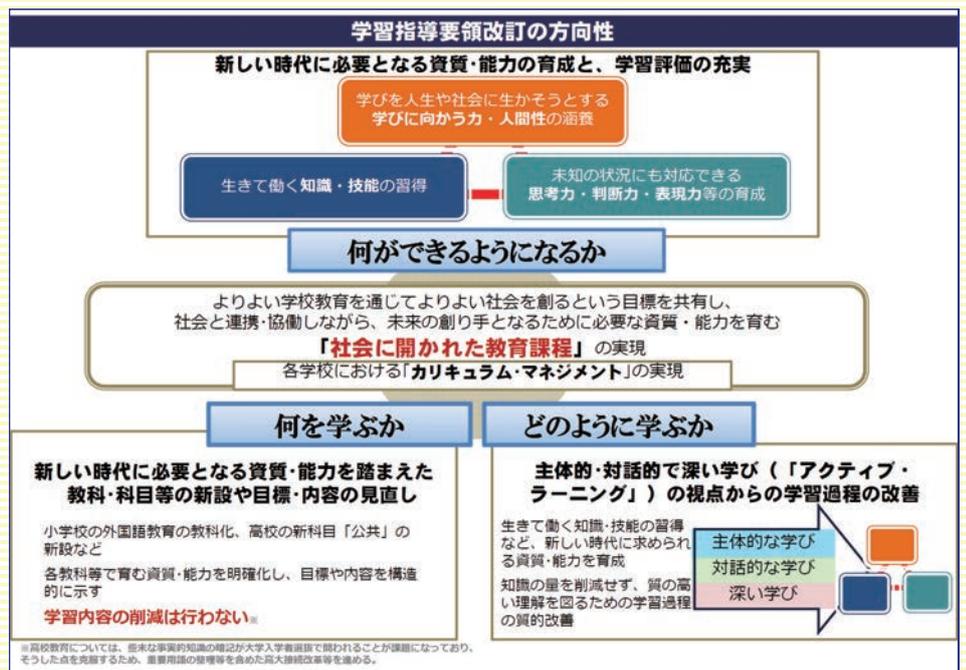


図1 学習指導要領改訂の方向性

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年12月)補足資料より

事例1 言語活動を通して主体的に学ぶ姿勢を育む 授業実践

単元(科目) Lesson4 Landfill Harmonic (コミュニケーション英語 I)

これまでの課題

- ・本文を見ずに教科書の内容を再現（リテリング）したり、自分の考えを伝えたりすることは、単調なやりとりになる傾向がある。
- ・書くことに対して苦手意識があり、一度インプットした内容をアウトプットとして文で表現することができない傾向がある。

授業改善のポイント

- ・主体的に話すことの基礎として、まず身近な物や既習の単語、教科書に関連する語を用いて、英語で相手に伝えられるようにする力をつけさせる。
- ・既習事項をパラフレーズする力がつくように授業展開を考える。その際のスモールステップとして、まず、題材の内容を絵や写真を利用して表現させる。活動を進める中で、絵や写真の枚数を段階的に減らすことで活動に負荷をかけ、最終的には何も見ずに題材の内容を再現できるところまで繰り返させる。

事例の概要

実践1 イラストの活用

題材の内容を絵で表したハンドアウトを用いることで、生徒たちは主体的にリテリング活動やリライト活動といった自己表現活動に取り組むようになる。これらの活動に向けて、生徒はより真剣に題材を読む。

活動の手順

- ① 複数の絵を見て、既習の本文内容を再生する。
- ② 段階的に絵の枚数を減らし、負荷をかけることで、題材の理解を確実にする。
- ③ 更なる知識の定着と、実践2の活動の際に必要な表現の定着を目指して最後にリライト活動を行う。

実践2 ミニプレゼンテーション

相手へ伝えることの発展練習として、ミニプレゼンテーションと称し、発表活動を行った。読み取った内容を基に、「どうしたら日常生活でゴミを減らせるのか」という質問について、個人で意見を書いた。その後、グループに分かれて、ゴミを減らす方法についてインターネット等で調べ、そのことについて分かったことを基に独自の減らし方をまとめ、ミニプレゼンテーションを行う。

活動における留意点

- ① 生徒の主体的な取組を優先し、教師は発表内容や英文などの細かい指導は行わない。
- ② 生徒から質問されたこと以外は、生徒同士の対話的な活動を見守り、実態把握に努める。
- ③ ミニプレゼンテーション後、クラス全体に共通した英語表現の誤りを教師が指摘する。

授業の様子

ビジュアルエイド（絵、イラスト）の効果

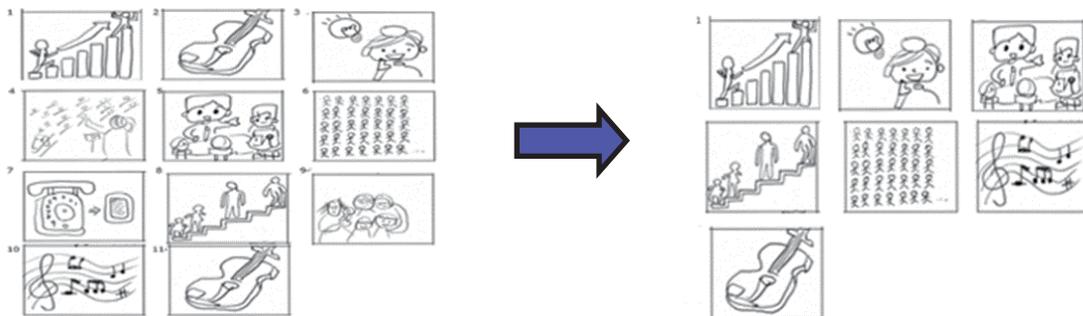
多くの生徒が絵を描写して、相手に伝える活動に興味をもって取り組んでいた。文字に頼らないことで英文を考えるのに苦労している様子は見られたが、興味があるので、粘り強く取り組んでいた。



イラストを見てその内容を伝え合う

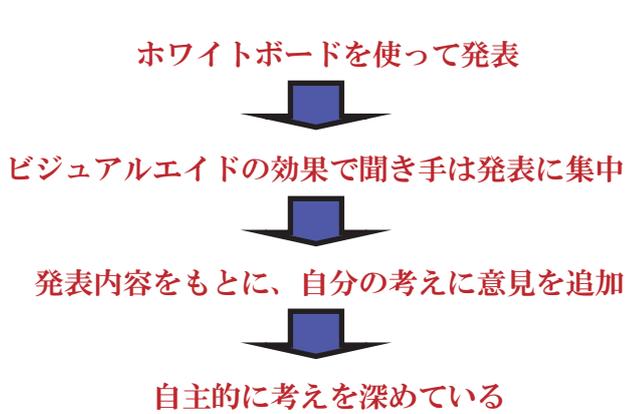
実践1 イラストの活用

絵を用いたリテリング活動や4コマ漫画の絵を見てペアと話す活動は以前から行っている。そのため、絵を見てペアに伝える活動は抵抗なく取り組んでいる。また、多くの生徒が絵を描写して、相手に伝える活動には興味、関心をもっていることが生徒の活動の様子から分かる。文字に頼らないことで英文を考えるのに苦勞している様子は見られるが、絵の枚数を段階的に減らすことによりゲーム感覚ももちながら粘り強く活動に取り組んでいた。



実践2 ミニプレゼンテーション

生徒の主体的な活動を優先し、教師は発表内容や英文などの細かい指導はここでは行わず、生徒からの質問以外は生徒同士の活動を見守りながら実態把握に努めるようにした。



生徒作成の発表用資料

成果と課題

- (1) 成果

難しい課題であっても、イラストを使うことで活動への意欲が湧いたため、ペアワークやグループワークに粘り強く取り組むことができた。また、技能の育成にも重点を置いて、活動実践前に反復練習を入れたことで知識や表現が身に付き、自信をもって発言できるようになった。発言することに抵抗がなくなると、発言に必要な英語表現を自ら辞書を用いて調べるなど、主体的に英語に関わるようになった。生徒たちの自発的な辞書活用が見られることで、英語の学習効果が上がることが期待できる。リテリング活動を通して、題材をなぞるだけではなく、自分の言葉で表現し相手に伝わるという成功体験が生徒の学習意欲の向上につながった。
- (2) 今後に向けて

グループ発表における指導の在り方に課題があった。ペアワークではある程度の自信をもって生徒たちは活動できているので、伝え方に関してはあまり問題にしてこなかった。しかし、グループワークになると聞く側の人数が多いため、緊張や不安で声が小さくなり、聞く側とのコミュニケーションが不足するようになった。普段の授業でグループワークが少ないことが原因と考えられる。授業中の活動に工夫を加え、複数の聞き手に自分が得た情報を英語で伝達することに慣れさせる必要があると感じた。工夫の第一歩は、既習事項の定着（インプット）を確実なものにする言語活動を繰り返し導入することからだろう。

今後は、理解できたと生徒が実感できる授業改善を行い生徒に達成感を得て欲しい。この達成感が大きいほど生徒たちが授業時の言語活動に、より主体的に取り組めるようになると考えている。

事例2 他者との対話を通して、自己表現力を高める授業実践

単元(科目) Lesson4 Chanel's Style (コミュニケーション英語II)

これまでの課題

- ・これまでの授業では、説明を聞く、与えられた文を読むといった受動的な活動が中心で、生徒が話したり書いたりする表現活動の機会が少なかった。また、生徒自身も自己表現することに抵抗を感じている。

授業改善のポイント

- ・他者との対話を通して、意見や情報を交換・共有する機会を多く設け、自己表現する楽しさや意義を感じられる活動を取り入れる。筆者や登場人物など他者の視点から考え、表現する活動を行うことで、内容理解をより深めることを目指す。

事例の概要

実践1 読み取った情報をまとめ、他者に伝える

シャネル考案の「女性のパンツルック」、「黒いドレス」、「ショルダーバッグ」が生まれた背景、特徴や世間の反応等をまとめ、その情報をペアで伝え合う。

生徒たちは、本文を読んで、シャネルの三つの製品の特徴をワークシートの表にまとめる。本文をそのまま抜き出すのではなく、簡潔な文に書き換えたり順番を工夫したりするなどして、要点を絞ってまとめる。

実践2 情報を整理して、わかりやすく伝える

4人グループでシャネルの三つの製品の宣伝を考え、1分以内で発表する。発表を聞いた後、最も良い宣伝をしたグループを選出する。まとめの活動として、雑誌に載せる製品の紹介記事を書く。新製品の販売促進を担当する社員であるという設定で、各グループで一つの製品を選び、宣伝する。作り手の気持ちになって製品の特徴やセールスポイントを話し合いながら、10分間で発表準備をする。1分間という限られた時間の中で、何をどのように伝えるべきかを考えながら、それぞれがまとめたワークシートの情報を突き合わせて整理する。

実践3 登場人物の立場になって考え、読みを深める

シャネルが1939年に突然ファッション業界から姿を消し、その後70歳になって復帰した理由を考え、発表する。

実践4 題材を通して学んだことを、自分の言葉でまとめる

まとめの活動として、題材のタイトルでもあるChanel's Styleから学んだこと、感じたことを書かせた。間違いを恐れず、学んだこと、考えたことを自由に書けるように、形式や語数の制限は設けず、制限時間20分でまとめた文を書くことを目標とした。

次の時間に、グループごとに生徒たちが抽出したエッセイに対して自分の感想との共通点や相違点、よいと思った表現について話し合い、意見交換を行った。

授業の様子

実践1 読み取った情報をまとめ、他者に伝える

まとめたワークシート(図1)を見ながら、ペアで順番に製品を紹介した。ワークシートに書いた短い英語のフレーズや矢印などを頭の中で英文に変換しながら話さなくては行けないため、自分の知っている英語で文を補いながら表現活動を行っていた。

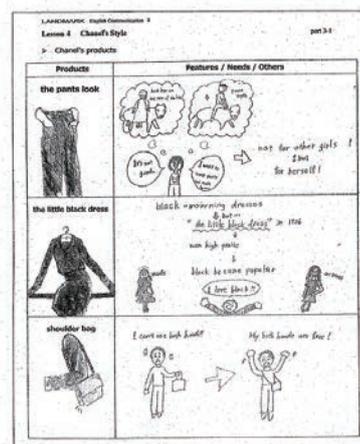


図1 【まとめたワークシート】

実践2 情報を整理して、わかりやすく伝える

発表は、本文の表現を適切に利用しながら、パフォーマンスなども交えて聴衆にアピールをした。



発表の様子

Hello, everyone. Today, I'd like to introduce pants look. This product is a revolution. Do you want to play basketball wearing a skirt? Do you want to play volleyball wearing a skirt? You are in trouble in this situation. You, you, and you. (pointing audience)

You wear this, you can play all sports. Let's run together wearing pants. You can do your best in the long distance race, Thank you.

実践3 登場人物の立場になって考え、読みを深める

シャネルの立場に立って、突然の引退と、本文では言及されていない70歳での復帰の理由を考えた。後者は本文に書かれていないため、シャネルの気持ちを想像して生徒自身で考えた理由を書かざるを得ず、最終的には引退の理由についても、復帰した理由とつながるように発表原稿を書き直す生徒が多かった(図2)。

実践4 題材を通して学んだことを、自分の言葉でまとめる

題材全体を読み返し、シャネルの「好きだから、自分が欲しいから、着たいから作る」という信念や、時代のニーズを反映した製品作り、批判に屈することなく自分らしさを通す姿などに対する自分の考え、感想を書くことができていた。

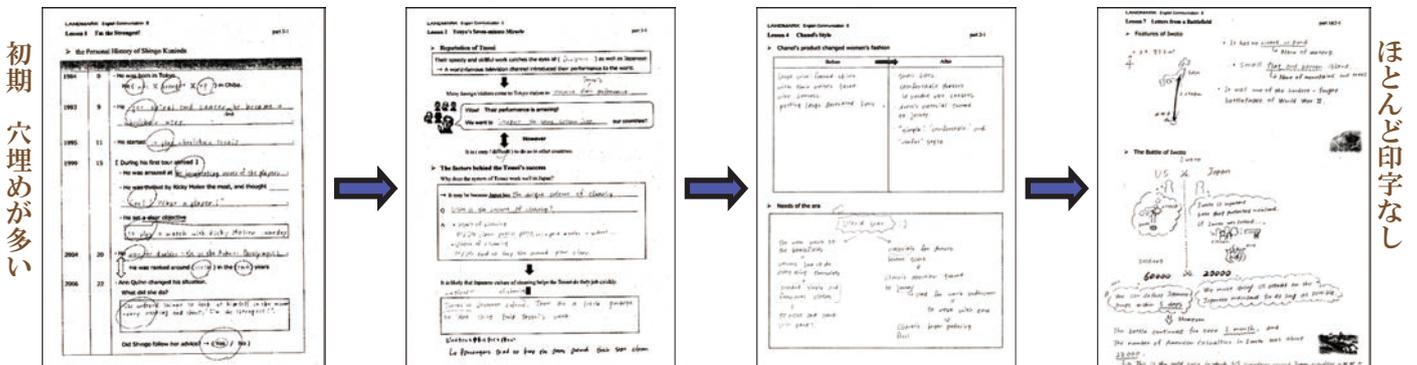
例) **It is important to express an idea. If we challenge something new, we must have enthusiasm and make an effort.**



図2【生徒が考えた「復帰の理由」】

☆ワークシートの変化による表現力の育成

段階的にワークシートに変化をつけることで、生徒が自分の言葉で感想等を記述できるようになってきている。



成果と課題

(1) 成果

「他者に伝える」ということを意識しながら読むことで、伝えるべき情報は何か、筆者からのメッセージは何なのかを考えながら読むことができた。また、自分でまとめた情報を基に、読み取った情報を他者に伝える活動では、自分の思考をたどり、本文を平易な語で言い換えながら再現するという、少し高度な作業をこなして、生徒たちは英語の表現力を伸ばした。また、読み取った情報をお互いに伝え合うことで、見落とした情報に気付いたり、異なった視点からの他者の考えを聞いたりして、より確かな内容理解につながられた。さらに、登場人物や筆者などの他者の視点から考える表現活動を行い、生徒が思考する機会が増えたことで、自分の考えを自分の言葉で表現することに意欲的になってきた。

(2) 今後に向けて

題材の内容理解をより深めるために、今後は教員と生徒との対話を増やし、教室全体での意見発表やアイデア共有をしていくことも必要と感じる。そうすることでより多くの意見や考えに触れることができ、様々な視点を得ることができる。そこで必要となるのが、教員の発問の工夫である。生徒が疑問をもち、探究し、ひらめきを促すような発問をすることで生徒の思考力が高まり、表面的な読解ではなく、内容理解の深化を図ることができるであろう。

事例3 自身の経験に基づいて思考し表現させる 授業実践

単元(科目) Lesson7 Political Correctness (コミュニケーション英語Ⅲ)

これまでの課題

- ・生徒は与えられた英文を読み、英文に関する問いの答えを探し出して答えることには慣れているが、英文について自分の考えをまとめ、他者と話し合う機会が少ないため表現活動自体に抵抗がある。
- ・題材の内容に関して教科書にある情報を利用するに留まってしまい、生徒のもつ既存の知識や経験と結び付けるための活動が足りていない。

授業改善のポイント

- ・パート毎に自分の考えをまとめさせてペアワークやグループワークにより他者と情報を交換・共有する自己表現の機会を多く設ける。生徒たちが表現活動に慣れ、他者との対話自体を楽しむことができるようにする。
- ・生徒自身の経験と実生活とのつながりを踏まえて思考する活動を取り入れる。これにより、題材を身近な事柄に置き換え、題材内容をより深く理解させる。

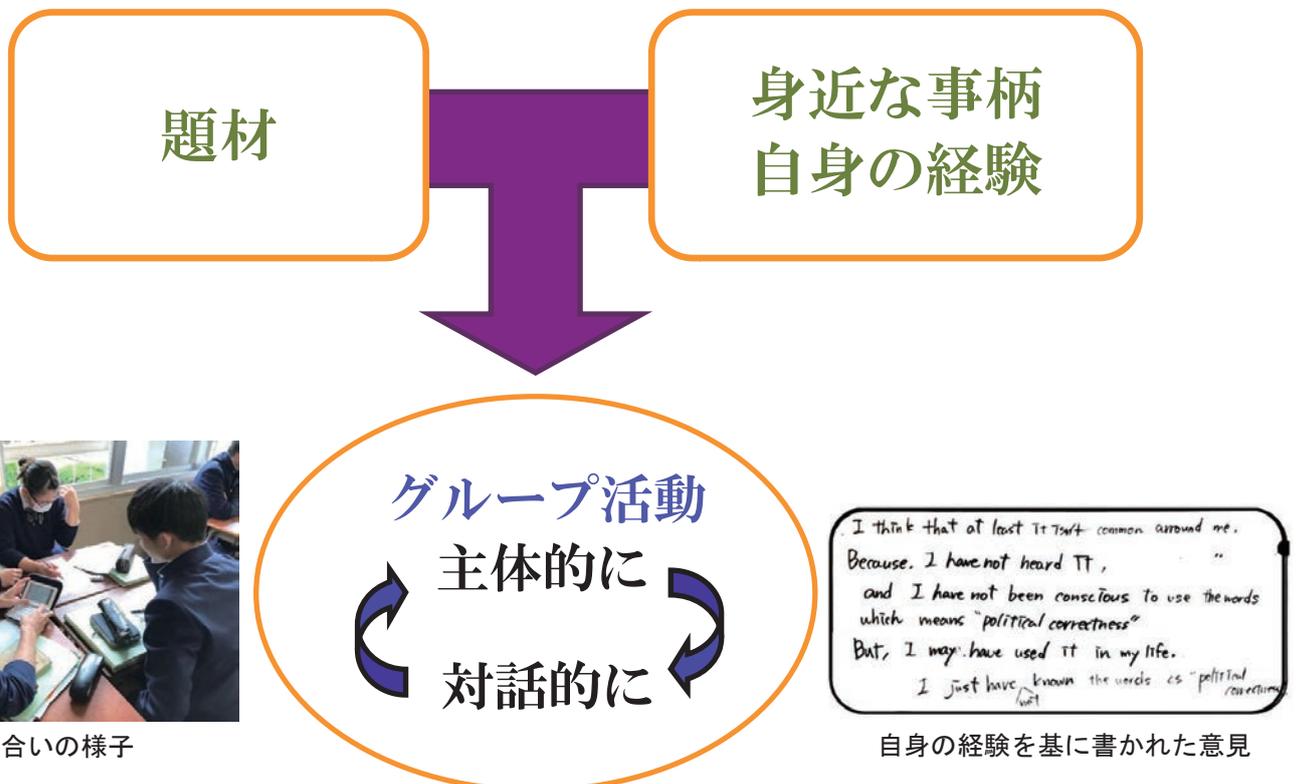
事例の概要

実践1 本文の内容について自国に置き換えて考え、他者に伝える

本文を読んで、海外での「ポリティカルコレクトネス運動」の状況を理解し、ポリティカルコレクトネスの用語で行き過ぎていると思われる表現についてグループで話し合いながら考えた。さらに、日本における「ポリティカルコレクトネス」について自分の考えをまとめ、ペアで伝え合った。

実践2 実践1を踏まえてグループで取り上げた題材について考えを深め、それを他者に伝える

自分がこれまで経験した差別についてペアで伝え合った後、グループ内でそれぞれの経験を伝え合う。その中から一人の経験を選び、それについて掘り下げて話し合った内容を発表した。



話し合いの様子

実践1と実践2の活動の中で、生徒たちの“意見を表現しようとする姿勢”を引き出そうとした。そのポイントは「身近な事柄」、「自身の経験」である。

授業の様子

実践1 本文の内容について自国に置き換えて考え、他者に伝える

「ポリティカルコレクトネス」について、自分の周囲の状況とリンクさせて考えることで、「ポリティカルコレクトネス」をより身近なものとして捉えることができていた。

また、自らの経験などを振り返りながら考えを積極的に書こうとする姿勢も見られた。さらには、自ら歴史背景などについて調べて自分の意見を述べる生徒もいた。

実践2 実践1を踏まえてグループで取り上げた題材について考えを深め、それを他者に伝える

あるグループでは、班員の一人が聞いた中学生の時の先生がイタリア旅行中に経験した店員とのやり取りを基に話し合い、発表した。状況をよりわかりやすく伝えるために先生と店員に扮し簡潔なやり取りでその場面を再現した寸劇を加えるなど工夫が見られた。

他のグループの発表を聞いて、生徒たちは「自分が思っていた以上に様々な差別が身近にある」という気付きを得ていた。



発表の様子

<Share your ideas!!>

○ Is "political correctness" common in Japan? Do people there talk about it in the same way as those in Western countries?

I think "political correctness" is common in Japan. Because, I often hear P.C words on a daily basis, but old words don't.

Western countries persecuted immigration long ago. So, Western are sensitive discrimination.

私は「政治的コレクトネス」は日本でも一般的に知られている。私はP.Cワードは毎日に聞くが、古い言葉はあまり聞かない。

ワークシート

Teacher: How much?
Clerk : It's 20 euro.
Teacher: OK. Here you are.
Clerk : Thank you.
Oh, wait.
Change! Yellow monkey!

成果と課題

(1) 成果

3年生は受験勉強への意識が高まり、単語や文法などの知識をより重視する傾向が強い。表現活動を敬遠しがちになっている生徒もいる。こうした状況の中、これまでに身に付けた知識や経験と単元の内容を結び付け、自分の言葉で自身の意見を表現し合うといった対話に重きを置いた授業を通して他者の考え方に触れる機会を多く設定した。他者の経験を聞いて情報を共有し、その中から一つを選んで内容を深める対話を通し、他者の異なる意見や考えに触れ、それを理解し、受け入れるとともに率直にお互いの考えを述べ合うことができた。

事後調査の結果では依然として英語学習において「単語を覚える」ことや「文法の知識」が大切であるとする生徒が多かったが、「たくさん会話する」や「たくさん聞く」、「意見や考えをたくさん書く」が知識の定着にも有効であると気付いた生徒もみられ、本実践の効果があつたようだ。英語は実際に声に出して使うことで定着することに気付いたことが大きな収穫といえる。本実践の後、生徒たちは音読やリテリングといった声に出す活動に意欲的に取り組むようになり、想像以上の良い結果が得られたと感じている。

(2) 今後に向けて

個々の英語力、特に単語力の制限から思考することをやめてしまった生徒がいたことも認めなくてはならない。言いたいことはあるが、それを英語でどのように表現すればいいのかと悩む中で、辞書を頼りに自身の意見を表現できた生徒も多いが、思考することをやめて、自分の語彙力に合った表現を選んだ生徒も少なからず見られた。

今回の実践では対話を重視するだけではなく、その活動の中にどういった学びがあるのかを意識した。その結果、生徒にとっては英語の表現力が上がったという実感はあるものの、題材のより深い学びに結び付いたという感想は少なかった。今後は、自分の複雑な思考をより正確に他者に伝えるための英語力と内容面での質の向上を達成する授業が必要となる。英語力の向上のためには、これまでに扱ってきた表現に加えて、よりアカデミックな表現など幅広い表現方法を提示して表現活動に取り入れていくことも大切である。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するために

平成28年12月に中央教育審議会から出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、「答申」と表記する。)の中で、「主体的・対話的で深い学び」についての基本的な考え方が示されました。それを踏まえて、三つの視点それぞれについての留意点等を以下にまとめます。

主体的な学びの実現に向けて

① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

《「答申」より》

生徒が主体的に学ぶためには、学びの有用性や必要性を認識させるとともに、生涯にわたって学び続ける力を身に付けさせる必要があります。そのためには、例えば、学習内容と日常や社会との結びつきや、自分のキャリア形成との関連に着目させながら、自発的に学びたいという興味・関心を引き出すように工夫することが大切です。また、学習の「見通し」をもたせたり、「振り返り」をさせたりすることで、生徒が「自立した学習者」としての力を身に付けることができるようにすることも重要です。

対話的な学びの実現に向けて

② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

《「答申」より》

対話的な学びの「対話」には、生徒間の話合いやグループ活動だけでなく、生徒と教師との対話(発問等のやりとり)、地域の人などとの対話(講話等)、先哲との対話(歴史上の人物や文学作品の作者などの考え方に触れること)なども含まれます。生徒が対話的に学ぶためには、自分とは違う意見や考え方に触れて、考えを広げたり深めたりする機会を設けることが重要です。そのためには、「対話のテーマを工夫すること」「自分の意見をもたせた上で対話をさせるようにすること」「他者の意見や考え方を尊重できる雰囲気を醸成すること」が大切です。

深い学びの実現に向けて

③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

子供たちが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の三つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要である。教員はこの中で、教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められる。

《「答申」より》

生徒が深い学びをするためには、習得・活用・探究という学びのプロセスを意識した授業づくりを通して、生徒が多面的・多角的に物事を捉えたり、様々な考え方を駆使したりしながら、課題解決に向けて思考を巡らせ、深い理解、考えの形成、新しい価値の創造などにつなげることができるようにすることが大切です。

その際、事物を捉えたり思考を進めたりするときの鍵となるものが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」です。生徒たちは、国語の授業の中で「言葉による見方・考え方」を、数学の授業の中で「数学的な見方・考え方」を…という具合に、それぞれの教科等でそれぞれの「見方や考え方」を働かせながら「深い学び」をします。また、そのような学びを通して身に付けた、深い理解や思考力・判断力・表現力等の資質・能力によって「見方・考え方」がより豊かになります。「見方・考え方」と「資質・能力」はこのような相互の関係にあるものです。

普段の授業を三つの視点から見つめ直し、

不断の授業改善をする。

という教師の意識が、生徒たちの未来を支えます。

栃木県総合教育センター

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070

TEL : 028 (665) 7204 (研究調査部)

FAX : 028 (665) 7303

本調査研究の詳細についてはWebサイトで公開しています。
こちらも御覧ください。

http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/kyokasido_h30/